研究協議Ⅰ　平成30年８月２日(木)　15：30～16：50

タ イ ト ル：学校事務の「カタチ」を創造する若者たち

サブタイトル：～「丹後府立高校生学校事務職員体験」事業の取組から～

発　表　者：京都府立学校事務長会丹後地域部会

１　はじめに

地方における若者の流出や少子化による人口減少の波は、私たちが勤務する京都府北部丹後地域においても例外ではありません。丹後地域の中学３年生の人数は平成25年度の1,100人（100%）から平成31年度には833人（75.7%）、平成40年度には617人（56.1%）にまで減少していくことが推移されています。

このため、一定規模のあった府立高校が小規模化することによる教育活動等の諸課題をできる限り解消すべく、平成32年度から「学舎制」の導入、分校については３つの分校を１つに統合し、京都フレックス学園構想に基づく学校づくりを進めることが決定されています。

一方で丹後地域に勤務する府立学校事務職員は、その全体の３分の２を若手職員や臨時的任用職員が占めており、若手職員には主に京都府南部地域など丹後地域以外の出身者が多く含まれています。

彼らは採用後３～５年間勤務し、この丹後地域で仕事を覚え、実力を身に付けた後、それぞれの出身地域等に異動していく、その後任として再び他地域の出身者を多く含む新規採用職員が配置されるという状況が繰り返されています。結果として、事務室は主にベテラン職員と初任者で構成され、中堅職員が非常に少なく、地元に根付く人材確保が困難な状況にあります。

これらのことから、丹後地域の高校生たちが地元に定住し、学校事務職員として活躍してもらえるような取組として、平成28年度から「丹後府立高校生学校事務職員体験」事業を実施しています。

この事業は丹後地域で学校事務職員を志す、あるいは興味をもつ高校生に対して丹後地域に勤務する若手職員が学校事務職員の魅力を伝える事業です。さらに、この事業により、丹後地域の高校生が一人でも多く学校事務職員採用試験を受験し、採用され、丹後地域の学校に配置され、地元に根づく流れを作ろうというものです。

学校事務職員という職の紹介を通して、受講生として参加した高校生と講師として活躍した若手職員が学校事務職員の魅力を感じつつ丹後地域の課題を共有し、未来へ向かう姿がそこにはありました。

彼らの姿を紹介させていただき、地域の未来を考え、これからの学校事務職員の果たす役割「カタチ」を皆さんとともに見いだすきっかけになれば幸いです。

２　京都府北部丹後地域について

（１）京都府北部丹後地域の紹介～「海の京都」から

【映像】観光ガイド　海の京都イメージムービー　～　中丹地区含む。

海の京都

～京都府の日本海側に面する「海の京都」～

古来より自然の神を奉る「和の心」を持つ独自の文化に海から伝わった先進文化が融合し、強大な古代文明を築きました。

この地は、数々の神話や国生み伝説の舞台「和（にほん）の源流」そのものです。

平安京では貴族の憧れの地として歌に詠まれ、江戸時代には北前船の寄港地として、以降も貿易の拠点として、大陸を結ぶ重要拠点として時を歩んできました。

「海の京都」には、天地山海の景観や人々の暮らしの中に、「和（にほん）の源流」が今もなお脈々と息づいています。

（２）丹後地域のプロフィール

丹後地域は、京阪神地域から約100ｋｍ離れていることなどが、観光・産業の振興を図る上で制約となってきました。近年は、平成26年に開通した舞鶴若狭自動車道、平成27年に全面開通した京都縦貫自動車道、平成28年度に京丹後市域まで延伸された山陰近畿自動車道や上下分離方式による事業再編をめざしている京都丹後鉄道をはじめ、交通基盤の整備等が着実に進められました。

一方で、丹後地域は府内で最も高齢化が進んでいるとともに、少子化による人口減少が続いています。このような状況から、「海の京都」構想に基づく交流人口の増加による地域活性化、織物業や機械金属業をはじめとする地域基幹産業の振興、丹後産コシヒカリや間人ガニ、イワガキ等のすばらしい「食」を生み出す農林水産業の一層の発展により、活力ある地域をつくるとともに、災害に強い地域づくりや、少子高齢化への対応等をはじめとした府民生活の安心・安全の基盤を確保することにより、未来を担う若者が地域に誇りと愛着を持ち、子どもから高齢者まで誰もが安心して生き生きと暮らせる元気な地域をめざしています。

（３）丹後地域府立学校

ア　各校のプロフィール

（ア）京都府立宮津高等学校（伊根分校）
（イ）京都府立海洋高等学校
（ウ）京都府立加悦谷高等学校
（エ）京都府立峰山高等学校（弥栄分校）
（オ）京都府立網野高等学校（間人分校）
（カ）京都府立久美浜高等学校
（キ）京都府立与謝の海支援学校

イ　丹後地域府立学校の課題

（ア）府内中学校３年生数の増減率の推計（丹後地域）

（イ）丹後府立高校再編

・　学舎制の導入

平成32年度から宮津・与謝地域では宮津高校と加悦谷高校、京丹後地域では網野高校と久美浜高校が連携して新しい「学舎」制の高校となります。「学舎」では、新しい取組としてＩＣＴを活用した遠隔教育システムの導入や、部活動や特別活動での連携を進めていきます。

・　京都フレックス学園構想に基づく学校づくり

宮津高校伊根分校、峰山高校弥栄分校、網野高校間人分校の３分校をまとめ、各分校の優れた教育実践を引継ぎ、その良さを活かした教育活動を展開する新しい高校（昼間定時制単位制総合学科）を峰山高校弥栄分校校地に平成32年度設置します。

・　平成32年度からの丹後地域府立高校の新しいカタチ

3　丹後府立高校生学校事務職員体験事業

（1）実施のきっかけ

「学校事務職員になりたい。」人数はごく僅かですが、就職指導の先生に紹介され、「学校事務職員」を尋ねて事務室を訪れる高校生徒の姿が各学校にありました。

彼らは”事務”という仕事はなんとなくイメージが湧きますが、「学校事務職員」の仕事が具体的にはどのようなものか検討もつきません。

「どんな仕事をされているのですか？」「採用試験はどんな内容ですか？」「仕事をしていて苦しかったこと、うれしかったことは何ですか？」。生徒は年齢、感覚が近く、最近の採用試験事情を知る若手事務職員に質問して情報を集め、自分の将来を考えていました。

各府立学校の事務職員は人数、年齢構成ともにまちまちで、「学校事務職員」という職業を伝えるには十分な内容、体制があるとは言えない状況でした。

一方で若手事務職員は人に対して、自分たちが日々遂行している業務内容については具体的に説明できますが、「学校事務職員」という職に就いた自分たちは学校にとって、世間一般にはどのような存在なのか、まだまだ覚える必要のある業務が多くある中で、ぼんやりとした印象でしか捉えられていませんでした。

このような中、丹後地域府立学校事務長が連携し、「学校事務職員になりたい」、「学校事務職員を知りたい」生徒が在籍校に関係なくインターンシップ（職場体験）ができる体制を考え、「丹後府立高校生学校事務職員体験」事業を実施することになりました。

（2）「丹後府立高校生学校事務職員体験」事業が求められた背景

ア　丹後地域に根付く学校事務職員の人材確保

- 新規採用事務職員の配置が多く、主事・臨採職員の占める割合が高い。
- 北部で育てた新規採用事務職員が南部へ転出していく。
- 若手が多い分、中堅事務職員が少ない。

イ　行政職員インターンシップの充実（生徒の幅広い進路選択のため）

丹後地域府立高校生のキャリア教育の一助として、公務員専門職のインターンシップ受入れについて消防署では10年前から、警察署も２年前から行われていたが、公務員一般職のインターンシップは全くなく、各校の就職指導教員からも、その充実が求められる状況にありました。

（3）実施内容について（実施要項から）

ア　目的

学校事務職員の先輩からの経験談を聞き、学校事務の実務を体験することにより、

(1) 自己の職業適性や将来設計について考える機会にするとともに、主体的な進路選択能力を高める。

(2) 働くことの意義を感じ取らせ、望ましい勤労観・職業観を養う。

(3) 現在の学習を将来の職業との関係で捉え、学習意欲の喚起を図る。

イ　実施日　夏季休業中（遅くとも８月10日までに）

ウ　対象者　学校事務職員という職業について、より多くの生徒に進路選択の一助とすることとその業務、魅力を理解してもらうために参加対象者の拡充を行った。

エ　運営体制

- 平成28度は事務長２名が企画し、若手事務職員３名の運営により事業を実施したが、平成29年度は企画及び運営をすべて若手事務職員８名が行い、事業を実施した。

・　また、より多くの若手学校事務職員の人材育成を図るために事業実施のほぼすべてを若手学校事務職員が担うこととした。
・　運営委員体制として、リーダー、副リーダーを設定し、実施に向け担当者会議を開催した。さらに実施後、自分たちで総括を行った。

オ　事前アンケート聴取

参加者の意識、意向、聞きたい内容等を事前に調査し把握することは有効であり、当日での座談会での進行の材料として活かすことができた。

カ　実施内容

（ア）学校事務仕事の概要

・仕事内容　・求められるスキル　・書籍から「仕事・生き方」について

（イ）講話

先輩学校事務職員からの経験談を話す。経験年数は１年目から５年目まで、校種も高校（普通科単独、専門学科）、特別支援学校。特に特別支援学校の内容は参加高校生の関心度は高い。

（ウ）実務実習

・（就学支援金事務）就学支援金受給資格申請書のチェックをしてみよう
・（文書事務等）文書の特性、基本的事項を説明、正誤演習問題
・（給与事務等）通勤手当認定におけるキルビメーター計測、
　教職員給与の概要を説明、特殊勤務手当に関する演習問題
・（諸証明事務＜ロールプレイ＞）グループ（３名）に分け、学校事務職員ＡＢＣ役となり窓口対応から証明書を発行し交付するまでの一連事務作業の体験を行う。
・（支出事務）チョーク購入までの経費伺い、見積合わせから請求書受理支払までの流れ
・（服務事務）出勤簿の整理、各種届の出勤簿表示

（エ）座談会・質疑応答

事前アンケートが進行の材料として活かすことができた。参加高校生から直接質問や意見を出してもらう。話しやすい雰囲気作り。受験対策（面接対策）に関心高い。面接試験質問例の紹介

（オ）事務室・施設見学

・事務室（金庫、クーラーの管理、自動火災報知設備、防犯設備）
・施設（書庫、電気設備、給水設備）

（４）実施の様子

【担当者会議】

【参加高校生と若手事務職員】

【実務実習(ﾛｰﾙﾌﾟﾚｲ)】

【座談会】

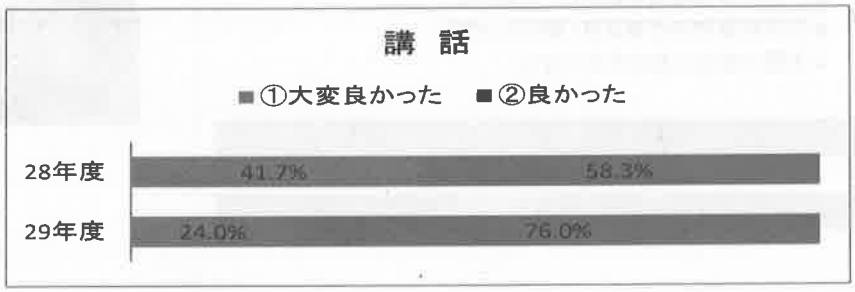
（５）実施の成果

ア　参加者数

	29年度	28年度
参加者数	９名	８名

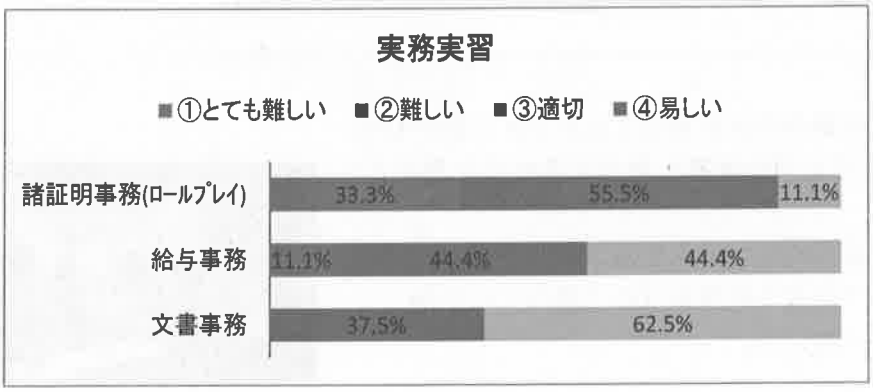
イ　参加者（高校生）アンケート結果から

（ア）講話



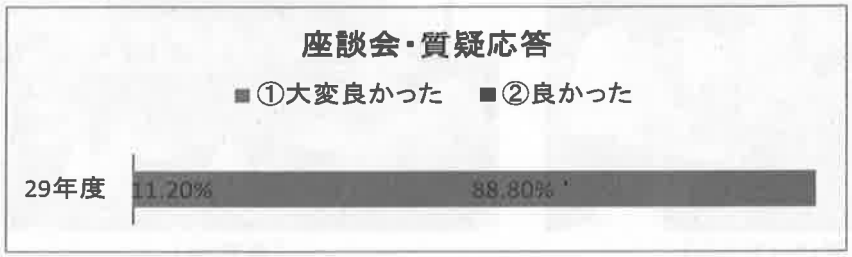
- やりがい、志望動機を聴くことができ、共感したり参考になった。
- 高校卒業後、就職した人の話を聞くことができ良かった。どんな仕事でも一つ一つを丁寧にすることが大切だと分かった。
- 特別支援学校の生徒を含め、好きで事務職員をしていることがよく分かり、「生徒のために」をすごく理想にしたいなと思った。
- １年目失敗や苦悩がたくさんあったこと、責任感を持つことが大切である、チーム全体で仕事していることが分かった。

（イ）実務実習（29年度）



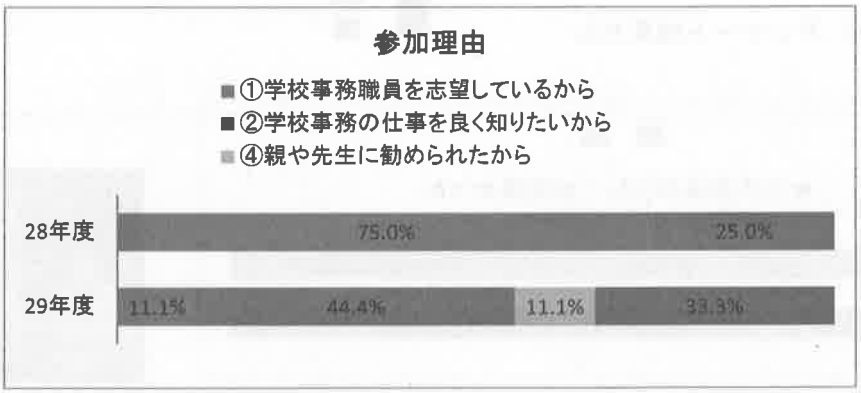
・　諸証明事務（ﾛｰﾙﾌﾟﾚｲ）は、すごく難しい。
・　３人での実習だったが、仕事では１人ですることになり大変だと思った。
・　実際にやってみるのとは違うなと感じた。

（ウ）座談会及び質疑応答

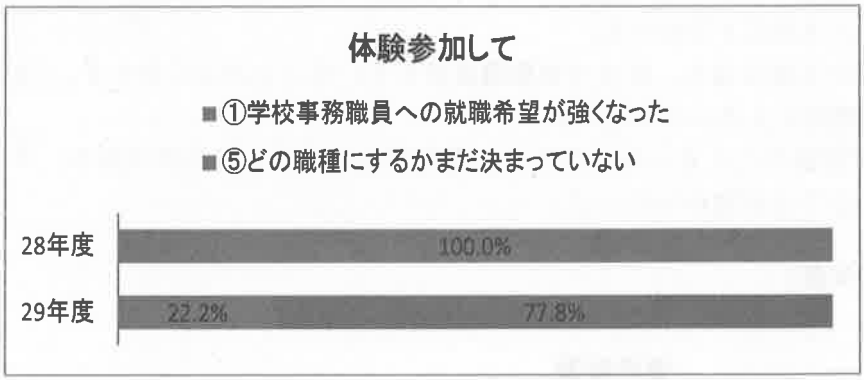


・　いろんなことが聞けて良かった。
・　仕事が楽しそうな雰囲気が伝わってきた。
・　仕事について楽しくなったという感想を聞いて希望が出てきた。

（エ）参加した理由



（オ）体験に参加して



・　学校事務の仕事の内容を知ることができて良かった。
・　公務員の中でも学校事務もやってみたいと思えた。

（カ）アンケート以外の参加高校生のコメント

学校事務ってあまり仕事がないと思っていたが、
仕事の多さに驚いた。

- 学校事務職員は事務室に１日中こもって書類ばかりつくる仕事だと思っていた。事務室から出て、いろいろな職員の人と協力してやることが多いですね。
- 学校事務って同じ仕事ばかり繰り返している仕事だと思った。
- 生徒のためを思って仕事をしているって素敵だなと思った。

ウ　参加者（高校生）に対する成果

・　少子化が進む丹後地域の中で、高校生に地域の状況を考えさせ、彼らの職業観やキャリア意識の形成に大きな影響を与えたと考えられる。

・　また、自分たちが住む地域の課題＝社会課題を「自分ごと」として捉え、自らの生き方に反映させていくことになると思われる。

エ　運営委員（若手事務職員）アンケート結果から

（ア）運営委員体制から

a　運営委員方式

・　運営委員は人数がやや多く、連携する上で難しさがあった。

・　事前の会議を重ね、細部まで打ち合わせができ、事業の完成度が上がったと思う。

・　リーダーという役職のあり方を考える良い機会となった。

b　新採１年目職員の選出及び役割

・　今回２名の新規採用職員を選出し、僅か５箇月の実務経験で問題作成担当の一員として尽力してもらったが、新規採用職員本人と他の運営委員の双方に負担が大きくなった。参加生徒に一番近い目線を活かし、志望動機や働いてみての感想などを話す等、適切な役割を考慮した方が良い。

（イ）各メニューから

a　講話

・　タイムキーパーの役が必要。原稿を持たない事務職員もいたが、時間内に趣旨に基づく内容を話すのであれば原稿化は必要。事務長は原稿を確認する必要あり。

・　講話は先輩の経験談として、参加者に一番働くことの意義、職業観を聞いて感じてもらえる内容であり、この事業には不可欠なものである。

b　実務実習

・　参加生徒が職業観を高めてもらうために、高校生の視点から考える必要がある。

・　実際の様々な場面において臨機応変に対応することが求められた。

・　今回挙げられた様々な課題は次回以降の取組に活かすことができる。

c　座談会

・　参加者への事前アンケートが功を奏す（運営委員からの提案）

参加者の意識、意向、聞きたい内容等を事前に調査し把握することは有効、当日での座談会での進行の材料として活かすことができた。

d　取組全体

・　高校生対象であることの視点の徹底

・　今回受講意欲までは気が回らず、自分たちの担当をしっかりとこなすことのみ終始してしまった。

（ウ）全体を通して、新たな気づき、発見

・　雑談力が重要ではないか、休憩等の何気ない雑談で雰囲気を良くすることが必要

・　リーダーという役職の在り方、タイプ。自分がなった場合の適性を考えることができた。目標達成に向けての順序を想定し、見通しを立てることの重要性に気づいた。

・　新たな気づき、発見を通して、今後に活かしたいことを具体的に実感できた。

・　自らのスキルアップとして捉えることができた。
・　普段やっている仕事を如何にわかりやすく伝えることができるか、自分の仕事を改めて振り返ることができた。
・　人前で話をすることは滅多にない経験で新鮮だった。学校事務職員が積極的に高校生を対象とした体験を企画・運営するなんて想像もしていなかったので驚いたが、細部までこだわり、綿密に進めた皆の姿を目の当たりにして、改めて丹後の学校事務職員のプロ意識の高さを実感した。
・　教育とは生徒が社会に出られるように育てることではないかと感じた。
・　学校事務職員は生徒にとって一番身近にある社会の入り口であることを感じた。

オ　運営委員（若手事務職員）に対する成果

（ア）高校生に「教えること」での効用

・　自己の業務と役割・目的、やりがいの再発見（自己実現＝仕事を通して自分らしく生きる）

自身の業務内容の理解を深めた。
学校における自身の役割について理解を深められた。
高校生と直接触れあうことにより、自校の生徒の姿が自身の業務結果の証明書になるという認識・実感を持てた。

（イ）他職種の業務理解（「チーム学校」の意識）

・　教員の立場・役割について実感し、理解を深められた。
・　他職種についてもそれぞれの立場・役割があり、理解することの重要性を知り、学校全体を見渡す範囲が広くなった。

（ウ）”自助・共助”の発想

・　若手事務職員自身が、「学校事務」という自分たちの職場を将来支えていく有為な人材を自ら獲得、育成していくという”自助・共助”の発想に立つことができた。

カ　学校事務職員Ｂ（大学卒以外）採用試験受検状況

29年度			28年度		
採用予定	丹後地域合格者	府全体合格者	採用予定	丹後地域合格者	府全体合格者
5名程度	3名 (1名)	5名	5名程度	2名 (1名)	8名

※　(　)は学校事務体験事業不参加者

キ　総括

（ア）体験事業の内容

・　高校生が見て聞いて感じて学んで魅力を感じてもらう趣旨には到達できたと思う。
・　講話、実務実習は若手事務職員自ら考えていただきながら、その自主性に任せて全面的にお願いした。今回の運営、司会も若手事務職員のカラーで、世代も近く参加者に寄り添う雰囲気が感じられるように配慮した。
・　次年度以降も丹後地域部会の事業として定着させるための実施モデルが確立できた。
・　成果と課題をまとめることで、ＰＤＣＡサイクル機能が働いている。今後の自分自身のＡ（アクション）に活かす（＝スキルアップに役立たせる）とともに、次年度事業のＰ（プ

ラン）に反映させることができる。

・　高校生がこの体験事業に参加して、学校事務職員の魅力を発見・発信してもらえる事業として創意工夫を加えながら継続した取組としていかなければならない。

（イ）運営に関わって

・　実務実習は、短時間で内容が難しかった。講師一人一人ではなく、一つの実習を講師全員で取組み、参加者への支援をしてみるものはどうかとの意見がある。

・　座談会は、参加生徒たちの積極的な発言が得られなかった。講話と同様、進行方法、事業全体での参加高校生との関わり方についても様々な場面を想定しておく必要がある。

・　参加高校生の受講意欲を引き出す工夫、積極的に参加してもらえるような雰囲気作りも重要である。

・　こうした様々な視点から事業の課題点を見出す若手学校事務職員の姿から、次年度実施へ向けての強い意欲を感じることができた。

（ウ）高校生への学校事務職員魅力の伝わり方、地元に根付く人材の育成

・　28年度において、講話は良かった以上の回答が100%、今回の参加を通して学校事務職員への志望、希望がより強くなった（回答100%）ことがは明確である。

　ただ、実務実習は、難しい以上が延べ14名(58.3%)、短時間での実務体験の困難性が出た、内容の検討、工夫が必要かなと考えられる。

・　29年度において、講話は参加生徒たちには自己の志望動機の振り返りや仕事に向かう姿勢、仕事の目的・理想等を考えさせる機会となり、先輩からの経験談は確実に生徒の心に伝わり、響いていることが分かる。

　また、実務実習は、特にロールプレイを取り入れた諸証明事務では88.8%もの生徒が「難しい」と回答し、運営者にとっては参加生徒が短時間で理解し、職業観を高める実務実習を行うことの難しさを痛感する一方で、参加生徒は実際の仕事を行う上での大変さ、苦労を実感し、働くことの意義を考させる機会となった。

（エ）若手事務職員の育成

・　若手事務職員はこれまでの自分の勤務、歩みを振り返り、整理することで、その時点での自己を総括できること、人前で（先輩として）話すことによってのコミュニケーション能力の育成等若手事務職員の人材育成にも貢献できたと考える。

・　運営委員体制は若手事務職員が自主的、主体的に考え、それぞれの内容を具現化することによって、運営委員での協議、チームとしてのまとまりが生まれ、事業に積極的に取り組む姿勢が見受けられた。

・　企画・運営する立場の苦労、支援することの難しさなど、様々な経験を通して成長していることが窺える。若手事務職員の育成、資質向上には確実につながる有効な事業である。

　また、若手事務職員に「自分たちで作り上げた事業」であることを意識付けることができた。

・　若手事務職員は経験年数に応じて、各人が自身の業務について、組織について、教育について等、様々な点で新たな気づきや発見をしている。彼らは普段「間接的」に関わっている教育活動に本事業を通じて、ほんの僅かであるが「直接的」に携わり、教員の指導業務を体験できた。

　このことは彼らにとって、教員をはじめ、他職種理解を進める必要性を意識付けする契機になるとともに、自身の果たすべき役割を見つめ直し、チームとして、何を目指し、何を取り組むべきかという根本を問いただし、目指すべき学校事務職員像の創造と確立につながっていくものと考えられる。

4　今後に向けた「学校事務職員体験」事業のモデル案

（１）実施要項

・【大前提】学校で働くこととは？　学校事務職員の魅力、地域に根ざす人材の確保

・【目　的】自己の職業適性や将来設計を考える機会と主体的な進路選択能力を高める。
望ましい勤労観、職業観を養う。

ア　事前アンケート～参加者の意向調査

イ　講話

（ア）学校事務職員の意義、役割、魅力、仕事内容、求められるスキル

（イ）先輩からの経験談～勤務の振り返り、志望動機、心がけていること

ウ　実務実習

（ア）職業体験（演習問題）
給与、文書事務、経費伺い、消耗品調達、修繕業者対応、旅費計算、出勤簿整理
諸証明、援護制度、修学支援金、学校預り金（ＰＴＡ、クラブ振興費）

（イ）ロールプレイ（模擬学校事務職員）　窓口・電話対応、諸証明発行対応

エ　座談会・ パネルディスカッション
（テーマ）どんな学校事務職員になりたいか？
”学校”に勤務する学校事務職員って？

オ　グループワーク
ＫＪ法　「学校事務職員になるには」学校事務職員像を浮かび上がらせる。
「”学校”に勤務する学校事務職員って？」

カ　事務室見学
校内施設設備見学

キ　試験対策
模擬面接編

5　これからの学校事務のカタチを創造する若者たち

（１）　丹後府立学校若手事務職員勉強会「楽志（らくし）塾」

ア　「楽志」とは、「自分の志（目標）に向かうための行動は、楽しんで行うこと。仕事など日々の行いが楽しければ、その志は本物である。」という意味

イ　設立は、平成25年11月。イノベーションリーダー（府教委事業）に任命された若手事務職員が丹後若手事務職員とともに学ぶ勉強会を立ち上げた。

ウ　設立要綱から

（ア）対象　会員は職名が「主事」又は「主任」のもの、丹後府立学校に勤務するもの、又は以前勤務していたもの
→　現在20数名の会員で、毎月の参加率は６～７割程度
※　主事、主任は在職年数に応じて補される職名、大凡中堅職員までを示す。

（イ）組織　丹後府立学校長会理事及び事務長会丹後地域部会理事も顧問として位置づく。
→　事務長会からも研修大会の講師依頼の調整等必要な支援を行う。

（ウ）活動　毎月１回、勤務時間外に学校外の会場でテーマを募り、学校事務に関する勉強会を自分たちで課題を設定し実施している。また、毎年１回は講師を招いて、研修大会を開催。29年度は講師として京都府立学校事務職員協会会長に講演をいただいた。

エ　活動内容　平成29年度活動内容は以下のとおり

回	年月日	内　　容	備　考
1	H29.5.10	代表・副代表の選出 自己紹介 演習　「わからないことがあったときどうするか」	オブザーバーから一言ずつ激励のお言葉をいただいた後、代表・副代表を選出 ３グループに分かれて討議
2	H29.6.13	演習　「日本学生支援機構奨学金について」「諸証明事務について」 間作班の決定	事前に諸証明事務に関する演習問題を配付し、２グループに分かれてロールプレイング 奨学金は３グループに分かれて討議 くじ引きで間作班を決定
3	H29.7.11	研究協議「施設設備の定期点検等について」 演習「差戻し事例から考える会計事務について」	事前に施設設備及び会計事務に関する演習問題を配付し、３グループに分かれて討議
4	H29.8.22	演習「三手当届出書類と根拠について」 研究協議「業務の効率化について」 楽志塾秋季研修会について	事前に三手当届出書類に関する演習問題を配付し、２グループに分かれて討議 研究協議はブレインライティングを活用して討議
5	H29.9.12	演習「社会保険、雇用保険の事務について」 研究協議「効率化で業務を３秒縮める」 楽志塾秋季研修会について	事前に社会保険等に関する演習問題を配付し、３グループに分かれて討議 研究協議は前回のアイデアをもとに実現するための具体的な方法を討議
6	H29.10.19	演習「教育財産の目的外使用許可に係る事務について」 楽志塾秋季研修会について	教育財産の目的外使用許可に係る事務について、３グループに分かれて演習
7	H29.11.16	研究協議「チェックのチェックについて」	事前にチェックの視点を磨くための例題を配布し、２グループに分かれてワールドカフェ形式で討議
8	H29.11.25	講演　「学校事務職員の本分とは」 　講師：京都府立学校事務職員協会　杉下会長（北稜高等学校事務長） 自由討議	学校事務職員の本分についての講演 事前にワークシートを配布し、３グループに分かれてワールドカフェ形式で討議
9	H29.12.19	楽志塾秋季研修会の振り返り 研究協議「学校事務職員の本分について」	秋季研修会で活用したワークシートを用いて、２グループに分かれて討議
10	H30.1.29	演習「現金や物品等を管理する帳簿について」	演習問題を配付し、２グループに分かれて根拠等を確認
11	H30.2.20	演習「モジョ～前向き思考の見つけ方～」 研究協議「年度末・年度当初スケジュールについて」	事前に「モジョ・スコアカード」を配布し、価値観リスト・ワークシートとともに記入 年度末・年度当初のスケジュールについて、３グループに分かれて討議
12	H30.3.13	研究協議「引継について」	事前にワークシートを配布し、２グループに分かれて討議

【楽志塾・全体協議】

※　楽志塾代表から会員への平成29年末メッセージ

「毎月の勉強会に、秋季研修会、日頃の情報交換など、今年度も様々な気づきの場をつくることができましたのは、皆様方に事務としての喜び、楽しみを見つけながら取り組んでいただいたことにほかなりません。」

（２）若者たちがこれからの学校事務の「カタチ」を創造する

今の若者たちは必ずしも「お金」や「地位」や「名誉」を重視せず、「楽しく生活を送りたい」、「楽しく仕事をしたい」という自分の幸せを求めるライフスタイルに変化してきました。彼らは自己の人生における「充実」を求めて「職」につきます。自己の人生におけ

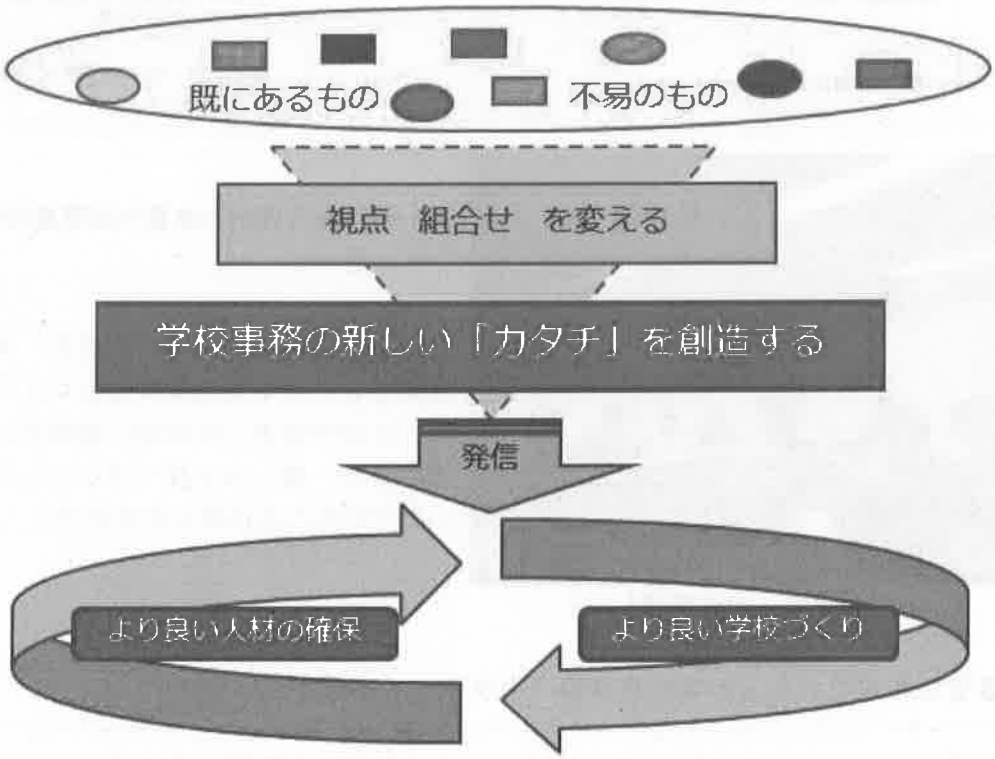
る「充実」について業務を通していかに味わうべきかを考えています。この「学校事務職員体験」事業から彼らは自身の仕事において、人生における「充実」を実現できることに改めて気づきました。これから予算執行の適正化や学校徴収金会計処理、文書管理等での大きな役割を果たすことが求められている中で、これらの事務業務における学校事務職員の工夫は教員の負担軽減や生徒と向き合う時間の確保につながっていきます。そして、その結果、より充実した学校生活を送ることのできた生徒たちが、自分たちと同じ学校事務職員を目指す姿を目の当たりにして、自己の人生における「充実」と目指したい学校づくりを重ね合わせることができる、つまり「工夫すること」とは主体的に学び続けることであり、それは仕事においてもプライベートにおいても「充実」するために大切なことだと実感したはずです。

彼らは自身のパーソナリティー（自分ブランド）の上に「学校事務職員」という名の下に与えられた権限を主体的にフル活用して、ありとあらゆる手段を用いて、よりよい学校づくりをしていくことでしょう。

それは、学校教育を通して自身を含めた教職員、生徒、保護者、地域住民の国民の幸福を創造していくこと。これまでもこれからも、「生徒を指導すること」以外の「捉えようのない役割」を果たす「学校事務職員」こそが今から求められる職であること、多様な役割を果たすためには人やモノ、お金など様々なものとリンクしていかなければならないことを実感しています。新しい「カタチ」を創ることは０から１にすることでありません。既にあるものを再度視点を変え、組み合わせを変え、新しい「カタチ」を創造していく。それぞれの要素は不易ですが、主体性をもって不易の組み合わせ方を変え、新しい「カタチ」にする。それを結果として「学校事務」としていくのではないでしょうか。

学校事務は無限の可能性を秘めています。私たちの職を広く世間の人々に積極的に発信してより良い人材の確保、より良い学校づくりの循環をつくる必要を感じます。

私たちは積極的に若者たちと関わりを持ち、その「質」を上げ、「到達目標」を共有し、そのための「プロセスを設計」していくことが求められていると考えます。



（３）新たな学校事務職員の創造への提案

ア　学校事務職員職業の魅力を語れる、教育を語れる、ＰＲできる職員の育成

人工知能ＡＩには、人と人をつなぐ、福祉・医療・地域をつなぐ仕事はできない。
ＡＩに任せることができる仕事、そうでない仕事がある。
「学校事務職員」には、学校の状況や地域の様子を見て、問題意識を高めておく、子供たちをどうしたらもっと良くなるかを考えること、そうした姿勢が求められる。
「学校事務職員」の存在意義（ＡＩにはできない仕事）を広く知ってもらうことで、地元雇用の確保、地域に根ざす人材確保につながることができるはずだ。

イ　学校事務職員は、教育という分野から、生徒の、保護者の、地域住民の、教職員の、国民の幸せを創造する。

「学校事務職員」は自校の学校教育目標を振り返り、「学校事務職員」の目線から自校をどのような学校にしたいのかを個々が考え、他者との考えを併せて共通の目標を意識し、個々の役割から具体的な行動を起こすことである。そして何よりも「学校事務職員」は教育推進に欠かすことのできない職であることを学校内外で認知していただく必要があるのではないだろうか。そこから更に私たちに対する希望や要望がいただけ、新たな役割の創造に繋がっていくのでなはいだろうか。「学校事務職員」は無限の可能性を秘めた存在なのである。

６　エンディング

～「拝啓　未来の学校事務職員の皆さんへ」～

丹後地域に勤務する学校事務職員がビデオレターにて出演し、手にはフリップを持ち、上記のテーマについて、メッセージを全国の皆さんへ発信します。